The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈生活の場に居続けられる〉 : 児童生活臨床における養育実践の成り立ち
Author(s)	中里, 晋三
Citation	臨床実践の現象学. 2020, 3(4), p. 42-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

臨床実践の現象学 Vol.3, No.4, pp.42-56

〈生活の場に居続けられる〉－児童生活臨床における養育実践の成り立ち

Staying in the life-space: A phenomenology of fostering in residential child care

東京大学大学院総合文化研究科　中里晋三

1. はじめに

1.1 目的とその背景、および手法

本論の目的は、児童生活臨床における養育実践の在りようを、実践者の個の経験に内在して描き出すことである。児童生活臨床とは児童福祉施設など何らかの事情で親と離れて暮らさざるをえない子どもと、その育ちを支える職員の日々の生活の現場である。養育は広義には実親による実子への関わりを含むが、親からの虐待や自身の障害といった困難をさまざまに抱える子どもに非血縁的な立場から関わっていく養育実践は、一般家庭での子育てと一括できない。とくに児童生活臨床について、その営みを考える必要があるゆえんである。しかし少数かつ非典型的であることは、養育という営みでそれが周辺的であることを意味しない。育ちがより困難な子どもに向き合う実践は、養育の何たるかを力強く示すはずだ。

本論が試みるのは、近年とくに看護領域において精力的に研究が行われる現象学的な質的分析の養育実践への適用である。この研究手法は、「事象そのものへ」という現象学の精神を受け継ぎ、実践を理論的に要請されたものとして理念的に語るのではなく、実践者の語りを通じて、実際に経験された実践そのものの在りようを描き出そうとする。そもそも児童生活臨床における養育実践は心理臨床の観点から語られることが多かった（高橋, 2009）。だが児童生活臨床とは子どもの心理を扱う以上に子どもの生活の場であり、何より「生活」という視点こそが中心に据えられなければならない。昨今は心理臨床の側からも生活場面の中心性が強調されつつあるが（村瀬, 2006; 滝川ほか編, 2016）、「生活の心理治療的意義」という限定は否めない。一方、海外では欧州を中心に 1970 年代から、教育思想の流れで「ソーシャル・ペダゴジー」という心理臨床などと異なる固有の領域として児童生活臨床が捉えられ、資格化も進んでいる（Smith et al., 2013）。だがそうした文脈でも、議論の一般性や周辺領域への接続が気にされるあまり個的な実践経験に向かう眼差しに乏しいきらいがあり、生きられた経験として個別の実践を扱い、その成り立ちを明らかにする視座が求められる。

とはいえ一括りに「現象学的な質的分析」と言っても、そこには互いに区別されるべき複数の分析手法が含まれる。なかでも本論が依拠するのは、西村ユミや村上靖彦によって提示されたものだ（松葉＆西村編, 2014）。実践者による実践経験の語り単体を、全体のモチーフと細かな表現の特徴に留意しながら読み込むことで、実践者の経験の背後でその経験を支えている実践の型を浮き彫りにし、また経験の構成要素の連環を明らかにする。本論ではその手法の妥当性を立ち入って論じる余裕はないが、次章以降で一人の施設職員の語りを取り上げるにあたり、とくに個別の事例（語り）を検討する意味については確認しておく。

現象学は「事象そのものへ」の道行において個的な経験に対して内的な視点を取るところから議論を始める。それゆえ、いかにして個的な経験の分析が一般的真理に到達するのかが常に問われる。だが本論では、現象学的な質的分析によって何らかの一般的真理が引き出されることを主張しない。個的な経験から引き出されるのはどこまでも個的なものと考える。

しかしながら個的な経験は、他の個を照らし出すことで個的なものを超え出る。当事者研究が「研究」となるのもそのような事情による。そして、当事者研究では生きづらさを抱える当事者がその問題を外在化して対象化するように（石原編, 2013）、現象学的な質的分析では経験を「語り」として取り出して対象化し、理解の道を開く。ここで「理解」とは、個的な経験をまさに個的な経験として必然にしているものの消息を明らかにすることだ。語りをただ言語的に理解することではない。個的な経験を一つのエピソードとして聞くだけでは、「そうでなければならない」ことが露わにならないからだ。そして経験を必然化する論理を明らかにするのが「理解」ならば、それは経験の当事者性からも自由なものとなり、語りを介した内在的分析が可能になる。ここが現象学的な質的分析が成立する地点であり、他の経験を類似と隔たりの絶えざる発見を通じて明るみに出す一つの光源をもたらすのだ。

1.2 児童福祉施設職員の戸田さん

本論では、ケアワーカー（児童指導員）として児童心理治療施設に勤務する戸田さん（仮名；40 代男性）の語りを取り上げ 、養育という実践が戸田さんという一人の実践者においてどのようなものとして成立しているかを見ていく[1]。

児童心理治療施設（略称「児心」）とは児童福祉法が定める児童福祉施設の一つで、同法第 43 の 5 に「心理的・精神的問題を抱え日常生活の多岐にわたり支障をきたしている子どもたちに、医療的な観点から生活支援を基盤とした心理治療を行う」として、その設置意図の記載がある。全国におよそ 50 施設を数えるのみで、わが国の社会的養護の大きな担い手である児童養護施設と比べると、その数は 10 分の 1 以下である。しかし近年、被虐待や発達障害など、社会的養護に入る子どもの抱える課題がいっそう複雑かつ深刻になるにつれ、機能的な重要性から漸次的に数を増やしている。また関連して 2016 年の児童福祉法改正のさい、旧来の情緒障害児短期治療施設（略称「情短」）という名称も、実態に即したより適切な名称が求められて現行のものに変更された。戸田さんが勤める児童心理治療施設は在所部門と通所部門の両方があるが、戸田さんは在所部門における 6 名定員の女子ホーム（小規模グループホーム）のホーム長として、他の 2 名の担当職員とともに子どもに関わっている。なお、同施設の母体である社会福祉法人は、他に児童養護施設なども運営している。

インタビューでは冒頭に「児童福祉施設で働く戸田さんは、普段どんなことを意識し、どんなことをされているのか、必要なら施設で働くことになった経緯にも触れつつ、お話しいただけますか。」と問いかけ、その後は相手の語りを妨げない返答に留意し、非構造化インタビューを行った（総時間は 81 分、文字起こし原稿は全 16 ページ）。分析方法は前述の通りだが、筆者は同施設でのべ二週間ほど、子ども達と寝食を共にしながら（ただし、戸田さんの担当ではない男子ホーム）、日々の職員の子どもへの関わりに触れ、スタッフミーティングに参加するなどしており、その経験も補助的に分析の手引きとなった。なお本論は最終稿を戸田さんにお見せして、ご本人にも納得のいく分析であることを確認したものである。

戸田さんの語りは、どのように子どもとの関係性を築くか（2 章）、どのように子どもの変化を生み出すか（3 章）という二つの問いへの応答となっていた。以下、順を追って見て

[1] 本研究は、東京大学大学院総合文化研究科「ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」の認可のもと実施している（課題番号 583-2）。また、利益相反は存在しない。

いく。（以降、引用では「」を用い、語りの構造を際立たせる概念化は〈〉を用いる。）

2. コミュニケーション成立の現場

2.1 衰弱する身体から居られる身体へ

最初に、現在の勤務先である法人に就職した戸田さんが、当初の予想とはうらはらに児童養護施設ではなく児童心理治療施設への配属となったところから語りを引きたい。

T: で、あれですよ、情短の知識っていうのがその頃まったくないまま、ここに来たので、えー、やっぱりその生活っていうのは壮絶なんですよね。あのー、子どもたちが、こう、不安定になって、もう毎日、う、泣き叫び、えー、暴力っていうか、ね、落ち着かない、そ、ものすごくこう落ち着かない日々がずっと続くわけですよ。それを僕は予想してなくって、もう「養護施設」っていう頭で、ね、いたので、「わわわわわ、大変なところに来てしまった。」と。それも、おー、女の子ホームですよ。うん。まだね、男なら何か、ね、同性の、おー、何か、た、扱いみたいなのがね、分かるじゃないですか。分かるというか、ね、気持ちも分かるところもあるから、うー、男なら、男の子ならまだ楽だったのかもしれないけど、それが女の子だったんですね。でしかもその時にいた女の子がすごくこう、うん、しんどい子だって、で、えー、今でも（笑）、あの、トップ3に数えられるくらいのかなりの強者（つわもの）だったんですね、えー。その子にまず最初にこう、んー、対応、対応するホーム、ま、その子のいるホームに、え、配属されて。えー、なので、もしそのときに、えー、情短、子どものね、こと、発達障害の知識や、あー、そのホームの、おー、ことを知った状態で入ってたら持たなかったかもしれないと思う。うん。何も無知だったから、「あ、こんなもんなんだ。」と思って、やー、乗り切れた部分はあるのかなと思う。で、もう来たときには、「なん、大変だ。」と。んー、「逃げろ！」みたいなね。フフッフ、それぐらいの気持ちでした、ほんとに。(pp. 2-3) 【1】[2]

戸田さんは施設職員としては一風変わったキャリアを歩んでいる。新卒で今の勤務先とは異なる児童養護施設に5年勤めた後、10年間トラック運転手として働き、再び児童福祉施設の現場に戻った。再就職のさいに戸田さんが思い描いていたのは、「楽しいことたくさんあって。うん、居心地も良くって」（p. 1）と回想された「養護施設」の現場である。しかし実際に戸田さんを待っていたのは「ものすごくこう落ち着かない日々がずっと続く」という、それまで経験したことのないような環境のなかで、「わわわわわ」と言葉を失い混乱するしかない「壮絶な」現場だった。気持ちも分からないから、扱いも分からないという女の子のホームだったばかりか、歴代の上位に名が挙がるほど対応の難しい子がいた。「しかも」「それも」が重なり、状況はとっさに「逃げろ！」と思うくらいに彼を圧倒している。だが戸田さんは、そのように知識としても経験としても全く未知である過酷な状況（生活）に身を置いて「乗り切れた」。「乗り切れた」とは、すなわち子どもとともにする生活の場での勤務を続けられたということだ。この〈生活の場に居続けられる〉ということは、最初の施設

[2] 本論を通じ、ページ数のみの表記は文字起こし原稿からの引用であることを示す。また【●】は引用の通し番号である。なお、引用中の「T」は戸田さん、「N」は筆者を指す。

を不本意ながら「辞めちゃった負い目[を子どもに]ずっと感じてた」(p. 2) 戸田さんがその失われやすさを繰り返し語るなかで浮かび上がる語り全体のモチーフなのだが、ここではまずそれが生活の場にいてこそ子どもに関われる実践可能性を意味するものとして現れる。

では知の支えが無いなかで、戸田さんがホームに居続けられたのはなぜか。それについて戸田さんは、逆に「[子どものことも、ホームのことも]何も無知だったから、『あ、こんなもんなんだ。』と思って[･･･]乗り切れた部分はあるのかなと思う。」と語る。つまり「無知」が〈生活の場に居続けられる〉を可能にしたのであり（「無知」以外に、「仲間」の存在も重要であることを後に見る)、知はむしろ居心地の良さが感じられない場所に居続けることを妨げる。なるほど知は多くの場合、対象や状況をコントロールする、あるいは対象や状況からのコントロールに抵抗するために求められ、使われる。しかし、「壮絶な」状況を戸田さんが「乗り切れた」のは状況をコントロールするのではなく、「あ、こんなもんなんだ。」とそのように前提されたものとしてそのままに受け取ったからだ。続く戸田さんの語りからは、それを可能にした「無知」がただ知の欠如ではなく、先入観に依らず、知的なものの外に立ちながら状況のただなかに身を置き続けるという、優れて身体的な在り方だと分かる。

T: うん。そんで、うんとー、もう、入ってそれこそ数ヶ月後には「おい、あいつ大丈夫か。」と。僕のことね。「大丈夫か、あいつ。」って、もう見る見るこう痩せ細っていくんですね。げっそり、こう、頬がこけ落ちてね。みんなから「あいつ、やばいぞ。」と、うん、いうような声が、こう、聞こえてくるのもまた面白かったんだけど（笑)、フフッフ、うん、あー、や、結構こう、ま、しんどいのが体に表れて来てる。うん。ただそれが無知だったから、もうこれから、それからも、それからもずーっと苦しめられていくんだけど、でも、んー、しー、すー、ん、す、だから乗り越えれたっていうのはあったのかもしれないなとは、そのときにね。でもね、その子からものすごいたくさんのことを学んでね。その子の対応をしていたからこそ、今の、おー、多少しんどい子でも対応できるっていうね。「ん、もう全然平気。」って思うんだよね（笑)。パンッ[手をたたく音]。
N: あ、そうなんですね。
T: うん、だんだんね、この感覚がマヒしてくっていうか、あ、情短、じ、児心寄りにな[って]、[児心寄り]の、この、精神力と忍耐力と、あ、あと感覚のマヒと、ウフフフッフ、こうどんどん付いていくっていうのはあるのかなあって思いますね。(p. 3) 【2】

「無知」の戸田さんは、「しんどい子」の対応で身体が急速かつ徹底的に衰弱していくなかで、それまで培った自身の感覚まで失っていく（「この感覚がマヒしていく」)。しかしそれは「児心寄り[の感覚]になって、[児心寄り]の、この精神力と忍耐力と」が「こうどんどん付いていく」ことで、先ほどの「あ、こんなもんなんだ。」という感慨に対応する感覚と、〈生活の場に居続けられる〉力を急速に獲得していく過程でもあって、自身の変容を楽しむ余裕すら生じている。ここでも繰り返される「ただそれが無知だったから」「だから乗り越えれた」とは、まさに「無知」が「それからもずーっと苦しめられていく」という状況を「ん、もう全然平気。」と思えるくらいに徹底的な（感覚する）身体の変容を可能にしたというこ

とだ[3]。その変容の徹底さは、「その子からものすごいたくさんのことを学ん」だことに支えられる。「でもね」を挟んで語りの焦点が戸田さん自身から子どもへと移る流れを追えば、「無知」とは「その子」に向かうベクトルだと分かるだろう。つまり「無知」だったから子どもに出会えたのであり（出会いもまた身体的であることを後に見る）、子どもに出会えたから、本来の力を失う代わりに〈生活の場に居続けられる〉力を子どもから授れたのだ。

ここでさらに 2.4 節を先取りするなら、子どもとのコミュニケーションが成立すると戸田さんは、それまで持てなかった子どもへの思いを「持てて、言える」ようになる。つまり、「わわわわわ」と言葉を失わせた状況も、「無知」で子どもと出会うことで言葉が生まれ、言葉の支えを得ていく。それもまた〈生活の場に居続けられる〉ことの一つの側面である。

2.2「全然もう見透かされる」という経験

戸田さんが勤めた児童心理治療施設は、想像を超えて過酷な現場でありつつ、戸田さんはその状況に適応し、平然とそこに居続けられるようになることで、日々の生活で子どもに関わっていけるようになった。ではそうした子どもへの関わりとはどのようなものなのか。

T: だからね、えー、きっと、ねえ、何も知らない人が、ね、あの、僕たちの仕事振りとかを見ると、きっと驚くだろうなと思いますよね。
N: うん、どう、どういうところで？
T: 例えば、その、日々の、こう、子どもたちのやりとり。もう、要するに、もうサンドバック状態なるわけですね。もうガッとこう火がつ、点いてイライラした。も、それとこう、攻撃、い、をすることで自分を守るっていうことも多いわけじゃないですか。ね。もうその感情のコントロールができない子に対する、う、対応でこう、う、グッとこう受ける側にまずは立って、そっからこう話をしていくんだけど、それを耐えてるような、耐えてる姿を見たら、多分[自分の]親だったら泣くでしょうね、うん。(p. 3) 【3】

現場の過酷さとは、まず何より突発的に感情のコントロールを失った子どもからの衝動的な攻撃を、「グッとこう受け」て「もうサンドバック」のようにただひたすらに「耐え」るという仕方で、子どもの抱えられない感情が吐き出されるままに身を任せることの過酷さである。そしてそれは、かつての戸田さんのように児童心理治療施設の現場から隔たった人には極めて異質な光景に映る。だがその厳しさに関わらず、子どもの衝動への即時的な対応は、それ自体で子どもとの関係性を築くものではない。偏にそれは「[まず受けて]そっからこう話をしていく」ことの成否にかかっている。日々の生活において子どもと関わる児童生活臨床では、いっときの対応をそれだけにせず、より長い時間的展望で次の展開を構想する視座が不可欠だが、ここではそれが子どもと「話をしていく」ということだ。しかし【4】で「全然繋がんない」と語られるように、戸田さんには何よりそれが難しかった。

---

[3] 【1】の「乗り切れた部分はあるのかなと思う」とともに、ここでも「んー、しー、すー、ん、す、だから乗り越えれたっていうのはあったのかもしれない」と留保が付くのは、「無知」と〈生活の場に居続けられる〉のつながりの曖昧さではなく（そうであればこれほど「無知」が強調されないだろう）、つながりを自覚的に捉えづらい身体性の現れと考える。

ところで村上は精神分析家である D.ウィニコットの議論を現象学的に語り直す形で、養育者が幼児の破壊的衝動に耐えて生き残ることによって、幼児の空想身体が（未分化な）破壊的空想を生き残る他者の支え（ホールディング）を得て組織化され、創造的な発達につながると述べている（「空想身体」についてはあらためて後述する）。他者の支えとは繰り返される現実の他者からの視線触発（視線、声、スキンシップなど）であるが、このとき幼児はもっとも原初的な他者との出会いを経験する（村上, 2011, pp. 79-86; Winnicott, 1958, Ch. 21）。他方、不適切な養育によって健全な発達が阻まれると、耐えがたい破滅の恐怖から自身を守ろうとするなかで「偽りの自己」が「侵襲的な環境の延長として発達して」「本当の自己を隠し」（Winnicott, 1958, p. 212）、後にそれが「破壊的で無慈悲なときだけ現実を感じる」ために攻撃性を露わにする（Winnicott, 1958, p. 213）。原初的な自己防衛に由来して真の交流が困難になるわけだが、そのさいもウィニコットによれば、臨床のなかで治療者が患者からの攻撃に耐え（「生き残り」）、安定した環境として患者を「抱える」（ホールド）ことで、「本当の自己」へ促された患者が創造性を回復し、コミュニケーションも可能になる（Winnicott, 1985, Ch. 22）。しかし戸田さんは、子どもからの攻撃にただ耐えるだけでは関係性を築けなかった。「生き残る」と「繋がる」のあいだを埋めるために「話をしていく」。それが戸田さんと子どものともに空想身体の関わりであることが、以降で明らかになる。

T: っていうのが、あのー、僕ここに来たときにね、うんとー、今のこんな感じじゃなかったんです、実は。こんな感じって言っても分かんないですけど、あの、要するにこう、カッコ付けだったんですよ。もうね、ンン、できれば、あ、自分のカッコ悪いとことか、情けないとことか、あー、女々しいとことか、フフフ、そういうものは隠して、カッコ付けたい人間だったんですわ。うん。あ、ま、まだまだ残ってますけどね、へへへ。でも、うんとね、それを隠したまんまでここは仕事が…、えっと仕事にならないんですよね、これ。実は。全然もう見透かされるっていうか、「あ、この人、本気じゃねぇな。」っていうのがバレる。
N: 子どもに。
T: 子どもに。100%バレるんですよ。だからそんな状態で「こうだろ。ああだろ。」って話をしても全然繋がんないんですよ、心が。心っていうか、感情と感情が、気持ちと気持ちが伝わらないんですよね。(p. 4) 【4】

戸田さんに生じた「そんな状態」から「こんな感じ」への変容が語られている。「そんな」とは、「今」「ここ」から時間的にも空間的にも隔たったところで、「そういうもの」や「それ」と名指される戸田さん自身の本来の弱さからも心理的に隔てられているという、現在の戸田さんからは三重に距離のあるかつての戸田さんのことである。二度現れる「実は」が「こんな感じ」と「そんな感じ」を架橋するが、「実は」という反転によってつながるしかない両者はそれほど質的に異なる。そして、その差は子どもの存在に由来するものだ。

戸田さんの前に現れた子どもは、別に「纏ってたというか[自分の中を]プロテクトしてた[…]防具」（p. 4）とも表現された戸田さんの「カッコ付け」を「100%」見破って、見透かしてくる絶対的な視線の持ち主だった。その透徹した視線のまえでは、「できれば[…]隠して、カッコ付けたい」という自分の意図までが見え透いてしまい、「話をしても全然繋がんない」。「できれば[…]隠して、カッコ付けたい」とは、つまるところ自分を守りたいという

意図である。子どもに向かって語りかけ、子どもと関係を作っていきたいという素振りのうらに、とはいえ自分を損ないたくないという思いがあるかぎり、子どもは「あ、この人、本気じゃねぇな。」と悟る。その結果の「全然繋がんない」状態とは、「感情と感情が[…]伝わらない」、つまり、双方向のコミュニケーションの成立としての「繋がる」が不首尾に終わる状態である。一つ前の引用では、子どもが自分を守るために自分のなかに収まらない感情を一方的に投げつけてくるのを戸田さんが受け（耐え）ていたが、今度はそれが、戸田さんが自分を守るために本当の感情の関与しないところで子どもに言葉を一方的に投げかけるという構図へとひっくり返っている。まさにこれはウィニコットが「偽りの自己」という概念で語ろうとした事態であるが、一方的な関わりの背後には共通して自己防御があるのであって、ここではコミュニケーションの失敗も双方向的に生じている[4]。

2.3 全てをさらけ出してぶつかり合うという衝撃

戸田さん自身がそうなるにはおよそ五年を要したと語る（p. 6）「こんな感じ」とは、何よりまず入職当時に戸田さんが衝撃を受けた先輩職員による子どもへの向き合い方だった。

T: で、あー、その、ま、そうですね、えー、私が入ったときの先輩方のね、このやり取りを見るわけじゃないですか。これは衝撃でしたよね、確かにね。あのー…、何かね、安物の演劇観てるような感じ。うん。とっても失礼な言い方ですけどね。あー、何かこう、ほんとに、えー、感情を、おー、丸出しにして子どもも大人ももうがっぷり四つでね、ぶつかり合うんすよね。それがもう丸裸なんですわ。「わ、そこまで見せんの、手のうちを？」、手のうちっていうかね、もうケツの穴まで見せるみたいなね、そんな世界だったんですわ。ああ、まあ、極端に言うと。それは衝撃でして、「ああそんなこと俺できないぞ。」と。うん。そこまで真剣にさ、自分の全てをさらけ出して、カッコ悪い自分をさらけ出して、えー、子どももね、えー、それに対して、もう真っ向勝負していくっていうね、そのやり取りを、あー、見たときは「あ、そん、もうこん、ここまではできない。」、うん、「そんなさらけ出すような勇気は俺にはない。」というのが、あー、す、第一印象でしたね。(p. 4) 【5】

「防具」をまとい、自分の弱い部分を「できれば[…]隠して、カッコ付けたい」と思っていた戸田さんが子どもに「自分の中[の思い]」（p. 4）を伝えられずにいた目の前で、先輩職員は「自分の全てをさらけ出して、カッコ悪い自分をさらけ出して」「感情を[…]丸出しにして」ぶつかっていく。それを見た戸田さんは「そんな[…]勇気は俺にはない。」と感じる。しかし実際のところ、全てを見透かしてしまう子どもに対しては、自身を守る行為の一切をやめ、すべてを相手にゆだねるように、己をそのまま差し出していくことでしかコミュニケーション成立は望めないのだ。勇気があるからではなく、子どもの絶対的な視線を前に、自分のもっとも弱いところを含め、全てをさらけ出さざるをえない状況に「ちょっとずつ」と

[4] ここで、ウィニコットが（治療者を除外して）患者についてのみ語ったことが、子どもと戸田さんの双方に認められる点が極めて重要だ。本論では後に「偽りの自己」から「本当の自己」への変化を主体化として語るが、そこでも顕著な対称性が繰り返されることになる。

いうリズムで追い込まれていく[5]。そしてこのような態度が「安物の演劇観てるような感じ」と表現されるのは、それが熟達した演技者のごとく自分の演技や役柄と一定の距離を取り、自身を外からまなざしつつ上手く演じるというのではなしに、自身の演技や役柄の世界に没入して距離が取れていないがために、あまりにその演技が生々しく、舞台の外の観客が観ていて恥ずかしくなるといった風のやり取りにならざるをえないからだ。一見したところ専門性の発揮であるかのような状況と適切な距離で上手く関わる態度では、その意図を見透かされてしまって子どもと繋がれないことが、ここでは示唆されている。

さて職員が全てをさらけ出して子どもに向かっていくならば、「子どもも[…]それに対して、もう真っ向勝負していく」。そしてその結果、「子どもも大人ももうがっぷり四つでね、ぶつかり合う」という事態に展開していく。つまり職員が「丸裸」で「感情を[…]丸出しにして」子どもにぶつかっていくとき、子どもはそれまでの〈透徹した視線〉であることをやめ、職員のぶつかりに応える身体として現れる。職員のぶつかりの強度に応答して、それを受け流すことなく（「真っ向」から）ぶつかっていく。それが「がっぷり四つ」という極度の身体的密着、しかし融合の一歩手前であるような渾身の努力として、職員と子どものコミュニケーションが可能になる状況を生み出す。職員と子どもが「繋が」り、「感情と感情が[…]伝わ」るという前述の双方向的なコミュニケーション成立の土台となる。

T: あのー、うん、そのー、ま、ちょっとずつだったんですけど、少しずつこう自分の中を恥ずかしがらずに、えー、ストレートに子どもたちにこう出すことで、やっぱ子どもたちってね、敏感で、それを受け止めてくれるんですよね。分かってくれるっていうか。「ああ、この人、真剣に」、えー、「向かって来てる。向かって来てくれるんだな。」っていうのを感じてくれるのが、こっちにも感じるわけですよ。「あ、やっぱ、こうやってやると分かるんだな。伝わるんだな。」っていうのが、「ああ」、感じられて[…]。(p. 4) 【6】

子どもは、戸田さんが裏表なく差し出す彼自身を（「自分の中を」）そのまま「受け止めてくれる」「敏感」な（感覚する）身体である。同様に鋭敏ではあるが、突き放した位置から戸田さんを見透かしてくる存在ではもはやない。この子どもとの関わりが「がっぷり四つ」であり、身体の密着において互いに相手が「感じてくれるのが、こっちにも感じる」。戸田さんが「ちょっとずつ[…]、少しずつ自分の中を[…]出す」ごとに、子どもが見逃さず「敏感」にそれを「受け止め」、そしてそれを戸田さんが「感じる」という繊細な共同行為こそ、ここで成立したコミュニケーションに他ならず、また「話をしていく」ことの内実である。

2.4「がっぷり四つ」の超越論的テレパシー

「話をしていく」というコミュニケーションの要諦が、徹底して身体的に語られたことの含意を確認しておきたい。「防具」も「丸裸」も「がっぷり四つ」もそれぞれがあくまで身体のメタファーでありながら、しかし生き生きした（あるいは生々しい）身体のメタファーでしか語りえなかったものを、身体性をめぐる現象学とともに考える。

---

[5] 「[分かり合えないことが繰り返されて]何年もいると、やっぱそうしないと仕事になんないみたいなやつ、[…]防具をね、ちょっとずつ、ちょっとずつ外すんですわ。」(p. 5)

村上は「空想世界の中心にいて空想世界そのものを生成しつつ空想を生きている」身体としての「空想身体」(Phantasieleib) という、もとはM.リシールに由来する概念を手掛かりに展開した現象学的治癒論のなかで、(単なる情報伝達ではない創造的な) コミュニケーションは空想身体を媒介に成立すると論じた (村上, 2011a; リシール, 2002)。空想身体は無際限の柔軟さによって現実を受容し、そこからの意味生成を司りつつ、現実を生きる身体 (Leib) に情動の痕跡を残す (村上, 2011a, pp. 65-70)。そして空想身体同士が出会うことで、ひとりの空想 (内容) が相手に共有されてしまう仕組みを、村上は「超越論的テレパシー」と呼び、そこにコミュニケーションの創造性 (意味生成) の源泉を見い出した (村上, 2011a, pp. 90-114)。たとえば石をおにぎりに見立てるようなごっこ遊びはその典型だが、ALS 患者の介護という限界的状況でも、空想における身体 (感覚) の同期が契機となって、身体の動きを封じられた患者とのコミュニケーションが成立する (村上, 2011b, Chap. 4)。

これら村上の議論を踏まえると、戸田さんと子どもの「がっぷり四つ」という空想身体の出会いを介し、互いの「感じ」(身体の感覚) が相手に伝わっていく超越論的テレパシーこそ、身体のメタファーで彩られた「話をしていく」というコミュニケーションの本質だと分かる。村上の例示と比較して、戸田さんのメタファーが描く空想と現実の間にはほとんど距離がない。その空想身体は子どもへの思い (情動) によって繋がる現実身体の分身のようだが、文字通りには現実でありえない空想の領域が作動することで、単なる言葉がけに終わらないコミュニケーションが成立するのだ。また「[超越論的テレパシーが可能にする]知覚的空想は、自分の可能性を超えるもの[他者性]が自分のなかに誕生するという逆説が日常的に起こる場である」(村上, 2011a, p. 100)。それに対応して「『向かって来てくれるんだな。』っていうのを感じてくれるのが、こっちにも感じる」と戸田さんが語るのは、「してくれる」存在として自分を超えた子どもが、逆に自分を「してくれる」存在と捉えるのが伝わるということだ。いわば超越をさらに超越する存在としての自己という認識によって、戸田さんは超越 (他者性) を内在化する。そして、超越論的テレパシーのもうひとつの創造性において、自分の可能性でも相手の可能性でもなかった全く新しいものが自律的非人称的に現れ、自他の態度変容を生む (村上, 2011a, pp. 109-114)。戸田さんはそのことも次のように語る。

T: あー、こう、やっぱり、出すと応えてくれるし、伝わるし、そこで「ああ、かわいいな。」とか「大事だな。」とかいう感情が芽生えるんですよね。だから今までそれこそ、[…]きょ、あのー、ストレートな感情を伝えることっていうのが、僕でき、できないタイプだったんですけど、もうほんとにね、えー、「大事だから、言ってんだ。」っていう、うー、ほんとに、ほんと、し、ほんとの感情で、え、「大事だから、お前の、が大事だからい、言ってるんだ。分かってくれ。」みたいな、そういうこう、ふ、今まで言えなかったような感情もあ、持てて、言えるっていう。うん。そこからこう何か、繋がり合えたなっていう、うん、感覚を持てたんですね。(p. 5) 【7】

戸田さんのなかに「大事だな。」という子どもへの「感情が芽生え」、今まで「できないタイプだった」ことが伝えられると、子どもとの関係性の変化が感じられる。「感情が芽生える」や「感情も[…]持てて、言える」といった中動態的表現で、子どもへの思いの自発的な発生が語られる。自発的であるが、むやみではない。「ほんとに、ほんと、[…]ほんとの感

情」という最も大切なものが「現実の受容を可能にする『意味』[として]非人称的に到来する」(村上, 2011a, p. 110)。それゆえに態度や関係性における大きな変容が可能になるのだ。

2.5 ホールディングの多層

激しい攻撃をひたすら身体的に受け止めるだけでは「全然繋がんな」かった子どもへの関わりは、戸田さんが自分をさらけ出して「丸裸」で「がっぷり四つ」のぶつかり合いをするという空想身体の関わりを必要としたし、それが「[子どもの]トゲや毒をこう少しずつ少しずつね、抜いていく」(p. 7) ことを可能にした。ウィニコットが「[情緒的発達のための]ほど良い環境」(Winnicott, 1958, p. 214) と呼んだ、抱っこに象徴される通常の幼児への母性的な関わりである現実身体によるホールディングだけでは不十分な場合、空想身体によるホールディングがさらに必要になると考えられる。だがその次元でのホールディングは、戸田さんが「防具」を外し、「丸裸」になるという、最も可傷的な存在として子どもと対峙して初めてなし得るものだ。そうした戸田さんの在り方に、コミュニケーションの可能性を最も可傷的な存在として裸出し、他者へ曝露することに認めた E.レヴィナスの議論は、空想との関連まで俎上には載らなかったとはいえ、その類似性において一定の示唆を与える (Levinas, 1978/1999)。しかしレヴィナスは、そもそも自己が他性に開かれる原初的な場面を先験的な仕方で語ったのであり、本論ではむしろ戸田さんについて「留保なき曝露」(Levinas, 1978/1999, p. 31/50) という議論からはみ出る部分が大事になる。実際に生じた変容としては、戸田さんが自身をさらけ出せたのは、それを支えるものが存在したからだ。

T: なのでね、何っていうかな、えっと、一緒の感情で仕事ができる仲間がいないと。例えば、その、施設のなかで一人、もうケツの穴を、んんー、さらけ出すような人が一人いたとしても、それに対して「俺もだ！」「俺もだ。」「私もだ。」って言って、その気持ちに、いー、賛同してくれて一緒に、こ、仕事をしてくれる人がいないとそれはできない。[…]またそれがね、おかしなもんで、えーと、そういう、フッ、く、苦しいんだけどそれを、何かここの職員さんはきっと、おー、面白がれる、楽しめる特殊な能力を持っている人が、あー、揃ってるだろうなあと思って。だから一緒に仕事してても面白いです。うん。だからそういう仲間がいるっていうことがとっても大切な、な、と思いますよ。うん。うん。なので、ね、僕もこのいうメンバーがいなかったらきっと脱げなかったんだろうな。[…]そういう先輩のせんざい、存在とか、その、せん、先輩たちがこう築き上げてきた、あー、施設の、おー、色だとか雰囲気だとか、そういうものはすごく重要だなって思いますよね。うん。(p. 5) 【8】

戸田さんが子どもに自分をさらけ出せるのは、「一緒の感情で仕事ができる仲間」がいるからで、今そういう仲間がいるのはかつてそういう先輩職員がいたからだ。つまり戸田さんを仲間が支え、そしてその仲間を「施設の[…]色だとか雰囲気」(あるいは、かつての仲間) が支えている。そしてここでも「一緒の感情」や「雰囲気」という身体のレベルと「ケツの穴を[…]さらけ出す」という空想身体のレベルの双方でのホールディングがある。現実と空想とが相即して、子どもを核としたホールディングが複層的に連なっていくのだ。さらに、こうしたホールディングのもとで自身をさらけ出して子どもに向かっていく場面で、「苦しいんだけど[…]楽しめる」ことが強調されている。この箇所の引用だけでは「楽しめる」が

単なる自虐とも採れてしまうが、そうではないことが語りの終盤で明らかになる。大人同士との対比で戸田さんが、子どもとの関係性の修復を語っている箇所から以下に引用する。

T: でも子どもと職員との間って完全にはシャッター降ろさないわけですよね。喧嘩してるけどちょっ[と]、カギは開いてるんですよ、シャッターのね。[…]でも子どもとの関係でそのカギを閉めるっていうことはないから、うん、絶対どっかでは分かり合えるっていうのね、思ってるから、んん、そこではね、しんどいけど、そこでは何かアクション起こし続ければ修正効いてくるから。それもまたね、しんどーいけど、シャッターがちょっと上がったら、たのかた、楽しかったりするんですよ、フフッ、だよ。だから、ずっと無視され続けたりね、す、ってざらにあるんだけど、でもお互いにそれはしんどい時間で、えー、あっても、そのしんどい時間があるからこそ、こうシャッターが開いた時に絆が深まるっていうね、そういうことにも繋がっていくから[…]。(pp. 9-10)【9】

「シャッターがちょっと上がった」という子どもの変化に気づければ、楽しさが生まれるというのが「楽しめる」の意味だった。「絶対どっかでは分かり合える」と確信しうるのも、コミュニケーションが空想身体を舞台にするからこそだ。現実には「ずっと無視され続け」ていても空想身体のレベルでは「完全にはシャッター降ろさない」から、コミュニケーションの可能性が開かれている。それが分かるから「しんどい時間」はかえって「絆が深まる」(だから「楽しかったりする」)予兆として、「アクション起こし続け」られる。その「アクション」とはもちろん「丸裸」でぶつかっていくことだが、これまでと同様、ここでも「シャッター」ごしに届く子どもからの触発がその契機になるのだ。まとめると、環境の多層のホールディングのもと子どもからの触発に促されて自分自身のコントロールを手放しつつ「がっぷり四つ」の関わりをするなかで生まれる関係性の変化への感度が「楽しめる」の正体だ。そしてそれこそが、2.1 節では子どもから与えられるものだった〈生活の場に居続けられる〉を自ら可能にし、内なる力として実践をより主体的に生み出していくものとなる。

T: しんどいんだけど、でも何か楽しめる感覚を持てる人が続けられると思う。「あー、しんどいしんどい。何でこんなに、く、苦しい思いを自分がしなきゃならないだろう。」じゃあ、まず間違いなく辞めちゃう。しんどいんだけど、このやり取りのなかで何か、楽しいとか、あー、を見出せなきゃあ、これは続かないですよね。(p. 8)【10】

3. 子どもの主体化を支える

〈生活の場に居続けられる〉が意味を持つのは、戸田さんたち職員にとってだけではない。本論の残りで、子どもの〈生活の場に居続けられる〉を支える戸田さんの関わりを見ていく。

N: いつかは[シャッターが]開くだろうなっていうのが、戸田さんのなかにあるんですか。
T: あります。今まででずっと、ま、うん、あの、な、何か途中で自分の方から開けない子は施設を出ていってしまいます。施設に何とかして残、何とかっていうか、施設に残ろうと思う子は、ここの施設で自分を何とか変えようとか、何かここ、んん、目的、課題に向き合うためにね、私たちの、と一緒にやろうっていう気持ちを持ってる子だから、うん、だからカ

ギ閉めないんですよ。でもカギ閉めるっていうのは、「こんなところで何の意味があるんだ。」っていう風に、えー、考えてる子だからやっぱり、えー、ぶつかり合い、たりし、すると出て行っちゃいますよね、自ら、去ります。んん、その差はありますよね。(p. 10)【11】
T: なので何があっても、「何のために来たんだよ！」つって、お、バーッとやると、いつかはこう分かり合える、うん。その目標や、あー、目的を、おー、忘れちゃったというか、投げ出しちゃった子は出ていきます。んん。うん。(p. 10)【12】

子どもの「シャッター」が開くことへの確信が今一度語られるが（「何があっても[･･･]いつかはこう分かり合える」)、戸田さんが開かせているわけではない（「自分の方から開けない子は施設を出て行ってしまう」)。「シャッター」を開けるのはあくまでも子どもで、「自分を何とか変えよう」という思いがそれを可能にする。児童心理治療施設は治療を目的とする児童福祉施設として、入所時には生活を通じて取り組む課題についての治療合意が図られるが（滝川ほか編, 2016, pp. 13-16)、その後の生活においても「しんどくても、ここで頑張る」(p. 10）と、子どもがしんどい状況で自分の気持ちに気付けるなら、変化が生まれ、施設の生活を続けられる。「しんどい」状況を引き受けて変化することで〈生活の場に居続けられる〉という逆説は、戸田さんの場合と同じだ。そして「[子どもが]大事だな」と戸田さんが気付けたように、「今の自分じゃいたくない」(p. 10）という変化への希求に子どもが気付けるのが「分かり合える」関係性、つまり「がっぷり四つ」で「話をしていく」ことなのだ（「『何のために来たんだよ！』つって[･･･]バーッとやる」)。「がっぷり四つ」が変化の起点となる同じ土俵のうえでは、変化への差し向けられ方が戸田さんも子どもも同等であること、そのなかで変化への感度（気付き）が中心的な役割を果たすこと、そして自分の思いへの気付きが主体化（本来的な自己の実現）の契機になることの三点を確認しておきたい。
だが施設での生活は、そうした主体化を妨げる「ルール」が知らず知らずのうちに堆積していく場でもあり、気付きを促す戸田さんの「問いかけ」が大きな意味を持つ。

T: 施設で生活していると、色んな、やっぱ当然ルールとか約束事はあるんですよね。そうすると、うーん、子どもたちは自分の頭で判断して行動することをしなくなるんです。[･･･]普通の感覚を養っていきたいっていうのがあって。うん、なんでもう、んー、ずっと生活してるとね、僕もわ、つむ、マヒしちゃうんです。僕も施設病なっちゃうんです、うん。「何々していいですか？」「いいよ」。うー、こっちも何か、うんー、ルールに縛ろう縛ろうしてしまう。もちろんそのはね、ルールに縛ったらね、えー、生活って規則正しく一日がこうスケジュール通りに行くわけですから、仕事が楽なんですよね。何にも考えんでもいい、何にも声掛けんでもいいし、考えることしなくてもいいですよ。でも、おー、それやっちゃうと、ね、んー、ロボットと生活してるようなもんだから。うん、だから自分の頭で、え、自分の頭で考えられない子ども、そういう子どもたちになって欲しくない。(p. 11)【13】

戸田さんは「一般的（標準的）な」という意味で「普通の」と言っているのではない。むしろその逆で、外から押し付けられた規範ではなく、自らのうちから規範を打ち立てられる精神の健全さが強調されている（だからそれが失われると「施設病」になる)。施設での生活への適応が再び「[感覚の]マヒ」と表現されるが、2.1 節で語られた「マヒ」が子どもと

の出会いを可能にするものだったのと対照的に、ここでの「マヒ」は子どもを「ロボット」にするもので、子どもとの出会いが不可能になる。子どもは「[自分で考えて行動するのが]すごい不安」(p. 12) だし、職員も「仕事が楽」だから、お互いが進んで「規則正し」い生活を作り上げてしまう。しかしその結果、生活のなかで過度な「ルール」が「子ども」という存在を疎外してしまうがゆえに、それへの働きかけが必要になる。

T: 「そんな聞かなくてもいい。自分の、あ、自分で考えて、えー、やればいいよ。」っていう風に伝えるんだけど、やっぱりね、長い子になれば長い子になるほどルール、そのホームでのルールに縛られちゃってて、ちょっとしたこちらの融通とかが、あー、「いいの、そんなことして？」っていう感覚になっちゃうんですね。うん。[ぶつかり合った]昨日なんかもそう。[･･･]もうルールにもうめっちゃくちゃに縛られてるんですよね。うん。「じゃあどうしたいのよ。」って、僕が、あのー、逆に問いかけたんですけど、うん。(pp. 11-12)【14】

なくてはならないルールはありつつ、しかし「ルールに縛られる」と「ちょっとしたこちらの融通」を逸脱としか見なせない。戸田さんが「自分の頭で」考えたものが「規則正し」い生活を脅かすものとしてしか受け取れない。だから戸田さんの「ちょっと」の気遣い (2.4 節の「してくれる」) が伝わらず、お互いの関係も深まらない。そのとき戸田さんはぶつかり合いのなかで「『じゃあどうしたいのよ。』って[･･･]問いかけ」ていく。それは思いと思いが伝わらない状況で、「がっぷり四つ」で子どもが自分の思いに気付けるきっかけを作っていく戸田さんのスタイルの表れで、一貫している。「しんどくても、ここで頑張る」では内的な妨げ(「シャッター」)が、「自分の頭で判断して行動する」では外的な妨げ(「ルール」)が問題になったが、いずれも戸田さんは子ども思いが変化を生む一点を見つめていたのだ。

4. 最後に－〈生活の場に居続けられる〉ために

2 章で見た戸田さんの変化および子どもとのコミュニケーションの成立と 3 章で見た子どもの変化は裏表であり、同じことである。戸田さんの「防具」も子どもの「シャッター」も「ルール」も、一見して自身を守るかに見えて潜在的な変化の可能性を隠し、主体化を遠ざける。そして「防具」を外すのも、「シャッター」を開けるのも、「ルール」を超えるのも、結局は本人が為すことでありながら、「がっぷり四つ」でぶつかり合える他者の存在がその可能性を開く。現実身体と空想身体がともに織りなす生活において、〈生活の場に居続けられる〉ことが主体化の前提であると同時に結果でもあり、それゆえ目指されるべきそのものであるような最大限の重要性を伴って、職員と子どもの別もなく現れる。それが戸田さんにとっての児童生活臨床の場であり、そこでの養育実践を形作るものなのだ。

＊ 謝辞＊

研究意図に賛同くださり、貴重なお話を聞かせてくださった戸田さん、そしてその語りに現れた子どもたちに最大の謝意を表します。また児童心理治療施設の職員を対象とする研究実施を快諾し、全面的に協力くださった社会福祉法人の理事長以下の皆さまに心よりお礼申し上げます。本論は第 118 回臨床実践の現象学研究会において元となる発表を行いました。最終稿に至る過程では、野口綾子さん（京都府立医科大学附属病院)、そして査読く

ださった先生方から大変有益なご助言をいただきました。ここに記して、感謝申し上げます。

【引用文献】

石原孝二編.(2013).『当事者研究の研究』. 医学書院.
Levinas, E. (1978). *Autrement qu'être ou au-délà de L'Essence*. Livre de Poche. (E.レヴィナス.(1999).『存在の彼方へ』(合田正人訳). 講談社.)
松葉祥一, 西村ユミ編.(2014).『現象学的看護研究－理論と分析の実際』. 医学書院.
村上靖彦.(2011a).『治癒の現象学』. 講談社.
村上靖彦.(2011b).『傷と再生の現象学－ケアと精神医学の現場へ』. 青土社.
村瀬嘉代子.(2008).『心理療法と生活事象－クライエントを支えるということ』. 金剛出版.
マルク・リシール.(2002).「現象学的無意識について－現象学的なエポケー、点滅そして還元」(村上靖彦訳).『現象学年報』18, 15-31.
Smith, M., Fulcher, L. and Doran, P. (2013). *Residential Child Care in Practice*. Policy Press.
高橋菜穂子.(2009).「児童養護施設入所児童への新たな援助実践に向けて：文献整理とこれからの展望」.『教育方法の探究』12, 25-32.
滝川一廣, 高田治, 谷村雅子, 全国情緒障害児短期治療施設協議会編.(2016).『子どもの心をはぐくむ生活－児童心理治療施設の総合環境療法』. 東京大学出版会.
Winnicott, D. W. (1958). *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. Tavistock Publications Ltd.

Abstract

In this study, I attempt to understand the practice of fostering through a phenomenological qualitative analysis of a narrative delivered by a caregiver working in a residential child care facility in Japan. The caregiver I interviewed, a male in his 40s, had experienced a significant bodily transformation when he started working with irritable children. As his original senses began to disappear, he instead started to obtain the capacity to "stay in the life-space" with the children. However, even after enduring the aggressive behavior of the children, he was unable to communicate with them since they had penetrated his self-defensiveness and lack of commitment. Only when the caregiver defenselessly faced the children head-on did he happen to notice his genuine affection toward them and begin communicating with them by expressing it. The frequency of bodily metaphors in the narrative focusing on the communication suggests that the communication was a matter of "body in phantasy," or Phantasieleib. I argue with reference to the phenomenological discussion of Yasuhiko Murakami on human healing that there is a multilayer of "holding" which enables the caregiver to communicate. Since it is no easy task also for children to "stay in the life-space," it is important that the caregiver helps them to recall their genuine inclination to overcome their difficulties, consequently allowing them to keep staying in that space. As such, the caregiver's defenseless communication can be said to facilitate the children's subjectifications.

The narrative of this caregiver in the residential child-care facility shows that, in his fostering practice, life-space is the place where those who are there are to be subjectified as long as they stay in

that space and are able to communicate with each other. The caregiver thus performs as a companion who aims to “stay in the life-space” with children.

要旨

本論では、児童生活臨床に携わる施設職員の語りの現象学的質的分析を通じ、養育という実践の内在的理解を試みた。本論で語りを取り上げた施設職員（40 代男性）は、関わりの難しい子どもとの生活を通じて大きな身体的変容を経験し、もとの感覚の消失とともに〈生活の場に居続けられる〉力を得ていった。しかし子どもの攻撃的な言動に耐えられたとしても、自己防衛の意図や本気でないことを見透かされるなかでは、子どもとのコミュニケーションに至らない。ありのままの姿でぶつかることで子どもへの愛情に気づき、それを伝えられて初めて、コミュニケーションが成立する。子どもとのコミュニケーションの場面で身体のメタファーが語りに現れるのは、コミュニケーションが空想身体（Phantasieleib）の問題である証拠だろう。本論では、村上靖彦による現象学的治癒論を参照しつつ、コミュニケーションが多層的なホールディングのもとで成立すると論じた。また〈生活の場に居続けられる〉とは子どもにとっても容易なことではない。子ども自身が自らの課題を乗り越えたいという気持ちに気付くための関わりが大切であり、職員がありのままの姿で子どもにぶつかることが子どもの主体化を支えていることが分かった。

本論で扱った施設職員の語りからは、児童生活臨床における生活が子どもも施設職員もそこに留まろうとするかぎり主体化がなされ、相互のコミュニケーションが可能になる場であり、施設職員はそこで子どもとともに〈生活の場に居続けられる〉を目指す同伴者であると理解された。

Shinzo NAKAZATO
gullashinzonak@gmail.com